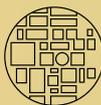


MUSEUM CRUISE GUIDE BOOK 2020-2021

「ミュージアム・クルーズ」

ガイドブック

2020 - 2021

21 



p.01 — はじめに

p.02 — 「ミュージアム・クルーズ」とは？

p.04 — 1日の流れ

p.06 — 2020年度の特徴

p.08 — 「ミュージアム・クルーズ」のツール

p.10 — 検討委員からのメッセージ

p.12 — 「クルーズ・クルー」について

p.14 — 子どもたちとの対話から

p.16 — スタッフエッセイ1：2020年の「ミュージアム・クルーズ」

p.18 — スタッフエッセイ2：子どもたちのすべての言葉は、詩のように佇んでいる

付録：2020年度「ミュージアム・クルーズ」ポスター



ようこそ！ 金沢21世紀美術館へ 「ミュージアム・クルーズ」で出会う笑顔のために

金沢21世紀美術館は「子どもたちとともに、成長する美術館」をミッションの1つに掲げています。2020年度の「ミュージアム・クルーズ」も、子どもたちだけでなく美術館に集う大人もともに成長する機会となりました。

子どもたちが見て、感じて、考える「ミュージアム・クルーズ」は学校の先生や作品鑑賞プログラム・メンバーの「クルーズ・クルー」、美術館スタッフが協働し行っています。

本書は2020年度のプログラム内容を紹介するものです。また、付録のポスターは子どもたちの活動風景や「まるびいへお手紙を書こう」というアンケートに書かれた感想やイラストをまとめています。

様々なことがあった2020年度ですが、今年美術館に来館した96%もの子どもたちは「まるびいにまた来たい」と言ってくれています。

本書とポスターが学校の先生や子どもたち、クルーズ・クルーなど様々な人が美術館を学びの場として活用するヒントになれば幸いです。

「3つの出会い」が子どもたちを待っています

まるびい

「まるびい」とは「まるいびじゅつかん」である金沢21世紀美術館の愛称です。来館中、子どもたちはユニークな建築空間を体感します。

現代アート

子どもたちは「コレクション展」を通じて同時代の様々な作品と接し、「コミッションワーク」と呼ばれる建物と一体化した恒久展示作品ともふれあいます。

クルーズ・クルー

「旅の仲間」の意味を持つ作品鑑賞プログラム・メンバーは、子どもたちが安全に活動し、気づきあえるよう、一緒に過ごします。

「ミュージアム・クルーズ」とは？



概要

金沢21世紀美術館は、活動の指針のひとつに「子どもたちとともに成長する美術館」を掲げています。その一環として2004年の開館時に「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」を実施し、金沢市内の小中学生約4万人が美術館を訪れました。この経験を活かし、2006年より金沢市内の小学校4年生を学校ごとに美術館に招待するプログラム「ミュージアム・クルーズ」を継続して行っています。「ミュージアム・クルーズ」は、子どもたちが少人数のグループでコレクション展を鑑賞し美術館を散策することで、感じる心を養い、地元の美術館に慣れ親しむ機会を生み出します。金沢市教育委員会や作品鑑賞プログラム・メンバーの「クルーズ・クルー」など様々な方の協力のもと、「金沢で生まれ育った子どもはみな、大人になる前に美術館に行ったことがある」という社会環境をつくります。

2020年度データ

期間：2020年10月27日(火) - 12月16日(水) / 2021年1月8日(金) - 1月28日(木)のべ38日間実施
 参加：金沢市内の小中学校や特別支援学校 59校
 4,070名(内訳：児童 3,850名 + 引率 220名)
 作品鑑賞プログラム・メンバー「クルーズ・クルー」81名
 主催：金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]
 共催：金沢市教育委員会
 助成：金沢ライオンズクラブ

目的

美術館における作品鑑賞を通じて “感じる心” を養う

- ・ 金沢21世紀美術館とコレクションを身近に感じ、大切に思う心を育てる
- ・ 世界のアーティストの様々な発想と表現に五感と身体全体で出会い、触れ合うことによって感受性、創造性、自主性、思考力、表現力を育てる
- ・ 色々な感じ方、見方、考え方、表現の仕方があることを知り、他の人の気持ちや考えを思いやる想像力とコミュニケーション力を育てる
- ・ アート(美術)が、世界の状況、社会の動き、情報、科学、文学、音楽、ダンス、演劇、人と人との関係や毎日の暮らしに深い関係をもっていることを知り、幅広い視野で学ぼうとする意欲や態度を育てる
- ・ 公共の空間でマナーを守りながら自由に楽しむ力を育てる

美術館における “子どもの鑑賞活動” を継続的に実施する

- ・ 美術館と学校による協力関係の継続・強化
- ・ 美術館における体験と、学校における授業との有機的な連携の推進

2020年度 年間スケジュール

ミュージアム・クルーズの1年間の流れを2020年度を例に紹介します。

	2020年						2021年		
	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学校の動き		第1回検討会		会場事前視察*2 (10月・1月の計8回)	学校来館 (10/27・12/16)		学校来館 (1/8・1/28)	第2回検討会	
クルーズ・クルーの活動				研修2 クルーズ・クルー 説明会・研修1	フォローアップ研修*1		クルーズ・クルー解散式		
美術館の動き				10/17 - 2021/5/9 コレクション展「スケールズ」					
				教職員無料ウイーク (10/17・10/24)			金沢市小中学校合同展 (1/4・1/13)		

フォローアップ研修*1

クルーズ・クルー向けに鑑賞に特化した任意参加の研修を行いました。鑑賞が話し手と聞き手の共同作業であることを体感する時間となりました。

「アートは、あなたの中にある。作品鑑賞ワークショップ」
 講師：伊達隆洋氏(京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター)
 内容：鑑賞の現場で起きる「みる」「かんがえる」「はなす」「きく」についてのレクチャー、作品を見る人と話を聞き出す人に分かれてのペアワーク



会場事前視察*2

子どもたちの来館前に、安全かつ有意義な美術館の訪問のために学校の先生と美術館スタッフが一緒に会場や作品を確認します。

対象：子どもたちを引率する予定の先生
 内容：来館に際しての概要説明と諸注意案内、ガイドマップ、紹介DVD(p.8)の確認と持ち帰り、コレクション展の観覧と意見交換、子どもたちの活動場所の確認、学校ごとのグループ数や時間などの調整



1日の流れ

午前

午後

9:15

12:45

クルーズ・クルー集合、打ち合わせ

来館する学校の情報や当日の館内の状況を共有します。子どもたちを見守る展示室や交流ゾーンの場所や、役割の分担も相談します。作品をより子どもと楽しく見るには？といった鑑賞のポイントも話します。



↓

↓

9:40

13:10

子どもたち到着、挨拶

子どもたちが到着すると、荷物を預かりクラスごとに各集合場所に移動します。クルーズ・クルーが「ミュージアム・クルーズ」の概要、館内の約束や集合時間などについてお話をします。手指消毒やチケットの配布もここでを行います。



↓

↓

10:00

13:30

鑑賞の時間

子どもたちは3-4人のグループに分かれ、ガイドマップを使って自主的にコレクション展を鑑賞します。クルーズ・クルーは各展示室で子どもたちを見守り、鑑賞を深めるための問いかけをします。



↓

↓

10:45

14:15

探検の時間

子どもたちは交流ゾーンや広場を見て回ります。クルーズ・クルーは館内各所で子どもたちを見守り、見どころを案内をします。

↓

↓

11:15

14:45

再集合、挨拶

集合場所に戻ります。子どもたちが感想を発表し、クルーズ・クルーやクラスの友達と共有します。そして「もう1回券」を紹介します。ここで手指消毒を再度行います。

↓

↓

11:25

14:55

子どもたち出発

子どもたちは荷物をとって、クルーズ・クルーに見送られ出発します。

↓

↓

11:30

15:00

クルーズ・クルー振り返り

今日の活動で気がついたことを共有し、次回へつなげます。

↓

↓

12:00

15:30

クルーズ・クルー解散



2020年度の特徴

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、これまでとは一部形式を変えて実施しました。その結果、より子どもたちとクルーズ・クルーが主体的に美術館で過ごす新しい形が見えました。

美術館での過ごし方

長時間の接触・子ども同士の距離感・展示室の人口密度など様々な観点から、下記のようにしました。

「鑑賞の時間」…コレクション展の鑑賞(45分)

「探検の時間」…交流ゾーンを見て回る(30分)

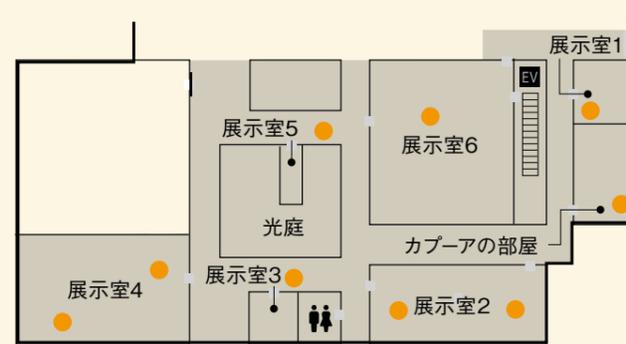
子どもたち

3-4人を1グループとし、自分たちだけで見て回りました。



クルーズ・クルー

目印にバンダナをつけて展示室や館内各所で子どもたちを待ち受けて話しかけました。



● クルーズ・クルー待ち受け場所 (例)

クルーズ・クルーの役割

クラスごとに分散して集合・挨拶を行うため「挨拶係」「バッグ係」「案内係」を設けました。クルーズ・クルーはクラスごとに役割を分担して協力しました。

挨拶係: 子どもたちの前で始まる前には活動の流れや約束を話し、再集合時には感想を聞きます。めくり看板やマイクを使い子どもたちに伝えるようにしました。

案内係: 入館・退館時に子どもたちを各場所に先導します。
入館時: 本多通り口→荷物預かり→集合場所→展示会会場
退館時: 集合場所→荷物預かり→本多通り口

バッグ係: 集合・再集合時、各クラスの集合場所にクルーズグッズの入ったバッグを持っています。他のクルーと協力して手指消毒・チケット配布を行います。



案内係の様子



左上から時計回りに:
めくり看板、マイク、消毒液、バッグ、バンダナ

安心して活動を行うために

バス台数の増加

子どもたちが間隔を開けて乗車できるように、バス台数を増やしました。

マスクの着用

美術館では入館時にマスク着用をお客様全員にお願いをしています。子どもたちや引率者にも同様にお願いいただきました。

アルコールによる手指消毒

集合場所で消毒します。一部アルコール不可児童は手洗いで対応しました。

荷物の預かり方

子ども同士の接触を減らすよう、レクチャーホールの座席(1-3クラス)と総合案内前の引き出し(4-5クラス)を1人1つずつ使用しました。

挨拶場所の分散

子どもたちの密集を避けるため、クラスごとに別れて集合・挨拶を行いました。(1組=Mの広場、2組=レクチャーホール横、3組=ミュージアムショップ前、4組=ぎんのゆか、5組=情報ラウンジ)

チケットの配布

接触を減らすため、集合場所でグループごとに渡し、展示会入口ではもぎらずに提示のみで入場しました。



手指消毒



レクチャーホールでの荷物預かり



総合案内前での荷物預かり

「ミュージアム・クルーズ」のツール

学校や美術館、家庭でも活動についての理解を深められるようにツールを用意しています。

「ミュージアム・クルーズ」紹介DVD

子どもたちに美術館での活動内容や魅力を伝え、引率者が事前指導に役立てられるよう3分程度の映像を制作しています。今年度は①「ミュージアム・クルーズ」紹介 ②「コレクション展 スケールズ」紹介の2種を制作配布しました。

チャプター1 構成

①「ミュージアム・クルーズ」招待状	⑤「鑑賞の時間」ではコレクション展を見よう	⑧地図を見ながらいろいろな見方で楽しもう	⑬作品は触らないで観よう
②「まるびい」愛称	⑥鑑賞の時間	⑨クルーズ・クルーとは...	⑭マスク・消毒をしよう
③ミュージアム・クルーズとは	⑦その後の「探検の時間」では美術館全体を見よう!	⑪大人の仲間クルーズ・クルーに話しかけてねクルーズ・クルーは赤いバンダナが目印!	⑯楽しい1日を過ごそうね。待っているよ~
④まるびいへようこそ!	⑧探検の時間	⑫まるびいで3つの約束「まるびいでは」... ①歩いて行動しよう ②作品はさわらないで見よう ③声の大きさに気をつけよう	⑮クレジット・ロゴ

チャプター2 構成

①イントロ モーショングラフィックス	⑤重さ	⑩身体ではかる	⑬いろいろなはかり方をためてみよう!
②コレクション展 スケールズを見よう!	⑥時間	⑪耳ではかる	⑭コレクション展 スケールズを見よう!
③スケールズって何?	⑦どうやって はかる?	⑫二人の距離はどれくらい?	⑯あなたは何をはかっている?
④スケールズとは... ものごとの大きさ、それを見る物差し、量りなどなどこの展覧会では、いろいろなはかり方を見ていこう	⑧見てはかる	⑭どれくらいの大ききかな?	⑮クレジット、ロゴ

制作:金沢21世紀美術館 デザイン・編集: オフィスプランカ

ガイドマップ

活動範囲やマナーの確認ができるほか、作品を鑑賞するヒントとして利用できます。折りたたんで小学4年生の手やポケットにも収まりやすいサイズ(9.1cm×12.8cm)で制作されています。今年度は子どもたちだけのグループで見回りながら鑑賞を深められるよう、問いかけの数や種類を増やしました。

- 活用例 学校で: 事前指導や来館後の振り返り
- 美術館で: ミュージアム・クルーズ活動中の意見交換や所在地の確認
- 家庭で: ミュージアム・クルーズの紹介や振り返り

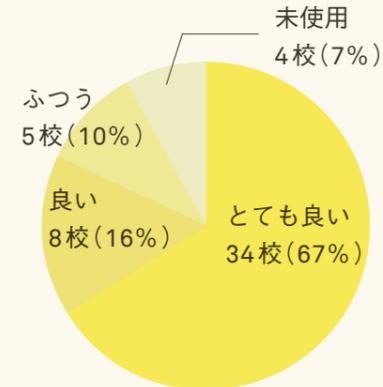


2020年度デザイン: 菊地敦己事務所

外側: プログラム紹介と館内での約束、探検の時間のオススメの場所、見て感じて考えるための問いかけやクイズ、無料で鑑賞できる日の紹介、名前欄ともう1回券
内側: 館内地図、見て感じて考えるための問いかけ、作品写真やデータ

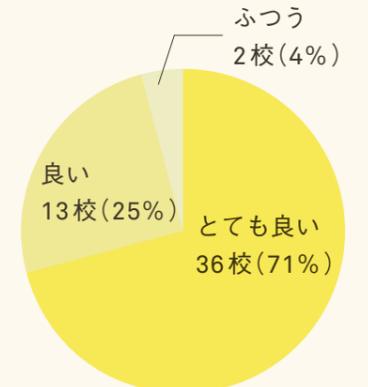
学校関係者アンケートより

DVD



・DVDは見てみたいという気分を盛り上げる効果があったと思います。注意もあり、教師が指導するより効果的でした。

ガイドマップ



・現代アートについて知らない子どもが多かったが、ガイドマップから作品のイメージをふくらませて当日を迎えていました。

検討委員からのメッセージ

検討会

こどもたちが美術館で安全に有意義な活動ができるように、金沢市教育委員会が推薦する検討委員の小学校教諭と美術館のスタッフがプログラムの内容を検討しています。

検討事項例：

ガイドマップの内容、会場事前視察、記録物などについて



それぞれの場所からそれぞれの見方で

金沢市立泉小学校 松本 啓孝先生

芸術には疎い私を「ミュージアム・クルーズ」の検討委員に任命していただいた。正直力になれることが思いつかなかった。それでも、自分にできることをしようと思った。校外での活動がほとんどできない中で「ミュージアム・クルーズ」に参加するというのを児童に話すととても喜んでいました。その場で21世紀美術館に訪れたことがあるか尋ねた所、半数以上の児童が訪れたことがあった。今回初めて美術館に足を運ぶ児童もいた。



「タレルの部屋」鑑賞風景

初めての児童でも想像できるように事前指導をした。紹介映像に興味津々の様子で期待に胸を膨らませていた。鑑賞している時にはじっくり観たり、何度も観たり、友達と作品について話をしたりして楽しんでいました。また、コレクション展の鑑賞だけでなく交流ゾーンなどを探検するときでもいきいきと鑑賞する様子が見られた。「タレルの部屋は時間が過ぎているのを感じない」「この2人はどうして背中合わせなのか不思議」などその時に言葉で発することができなかつたとしても自分なりの見方で楽しむことができていたようだ。

分かるとか、よく知っているとかではなくそれぞれの楽しみ方ができていた。

ご褒美のミュージアム・クルーズ！

金沢市立泉野小学校 馬場 志穂先生

「4年生いいな～」

今年度はコロナ禍ということで、4年生の校外学習や行事（春の遠足、社会科見学、秋の遠足）が中止のオンパレード。そんな中、金沢市の4年生だけに与えられた特権「ミュージアム・クルーズ」が決行されるとお知らせが入ったときに職員室にあがった感嘆の声である。

今年度、検討委員会に参加して、コロナ禍にありながら例年通りに決行するための～安全で安心できる～「ミュージアム・クルーズ」のあり方を模索するスタッフ皆さんの熱い思いを身近に感じることができた。こんな熱い思いに支えられている特権だということが分かり、検討委員になれたことは感謝の一言しかない。

本校は11月10日に来館した。11月10日は、私が担当するクラスの研究授業が終わった次の日。まさに「ミュージアム・クルーズ」は、私たちにとって「いいな～」のご褒美だった。本校は例年通り90分間まるびいに滞在した。ゆっくり鑑賞でき、ご褒美を堪能した時間だった。



「村上慧 移住を生活する」鑑賞風景

豊かさの体験

金沢市立三馬小学校 加納 亜紀先生

金沢市すべての小学校4年生を招待する鑑賞プログラムの「ミュージアム・クルーズ」。現在活躍している作家の出来たてホヤホヤの作品を見て感じて伝え合う。

現代アートを「よくわからない」「何なんだ？」と感じる大人は少なくない。しかし子どもは、真っさらの心で作品と出会い、瞳をキラキラさせて楽しむ。面白さやよさを見つける。最後には体全体を使って表現し始める。

今をトキメク作家の作品を間近に見る驚き。何を感じてもよい自由さ。感じたことを伝え合ってわかる共感のうれしさ、人と自分は違うという発見。そして、互いの考えを認め合う。とても多くのことを子ども達は肌感覚で学んでいる。

文化はすぐに効く特效薬ではないが、人の内面を耕し豊かな生き方につながる力を持っていると思う。金沢は前田家が文化を奨励したことで、今も生活のいたるところに文化の香りが息づいている。

「またいきたい」子どもたちはまぶしい笑顔で言う。この体験が心豊かに生きていききっかけになり、成長した子ども達が文化や街の発展につながったら幸せに思う。このプログラムに関わることができたことに感謝したい。



展示室2 鑑賞風景

作品鑑賞プログラムメンバー クルーズ・クルーについて

概要

「ミュージアム・クルーズ」では美術館を訪れる子どもと作品を鑑賞し、美術館体験をサポートします。解説ボランティアではなく、旅の仲間として子どもたち同士の対話を促し、安全を見守ります。

今年度のクルーズ・クルー：

男女比3:7、初参加者と経験者比6:4 大学生の割合40%

例年は初参加者と経験者比が3:7ほどでしたが、今年は割合が逆転し6:4と初参加の方の方が上回りました。

さらに、例年1割程度であった大学生が4割を占めました。

新しい方法に柔軟に対応し、前向きに取り組む雰囲気が生まれました。

応募条件

20歳以上の方／説明会・研修に全て参加できる方／月2回程度、子どもたちとの活動に参加できる方

※無償での活動となります。

2020年度 クルーズ・クルー（50音順、敬称略、81名）

厚見 行正、阿部 京也、伊佐 春輝、石田 晴太郎、今村 良栄、岩垣 豊、鷺沢 一子、梅田 美枝子、遠藤 カヨ、大石 滯波、大辻 尚美、大友 孝太、大友 理視、大西 智子、大野 広輝、桶本 智美、大日方 澄江、数馬 愛加里、喜多久恵、木村 潤子、黒瀬 真美子、今度 直子、齋藤 廉太郎、酒井 武志、笹本 葉月、澤村 仁志、清水 皓亮、下出 珠子、定川 浩輔、関屋 宗真、瀬戸 勇樹、高井 ひとみ、高岡 幸子、高木 寿美子、高木 布喜子、高橋 月香、瀧野 紗希、武野 一雄、竹林 あおい、多田 明加、多田 美幸、多長 桂子、舘田 美玖、田中 楓、棚部 芹、塚本 浩子、椿野 智之、鶴田 暁子、出口 慶太、寺尾 ユリ子、洞庭 都子、豊蔵 健夫、中田 舞衣、中村 倫、西田 拓弥、西野 文子、仁歩 義晴、野崎 美羽、能村 貴宏、橋本 和栄、林 朋子、氷見 房子、福田 外喜子、福田 琉晟、藤井 葵、本多 茜、前外喜子、松本 取子、三浦 靖子、蓑毛 さやか、宮丸 慶子、宮丸 静夫、向井 淳子、村井 淑子、室石 望、叶 微萌、吉井 一葉、吉田 奈々、吉野 依子、六田 正紀、和田 伸子

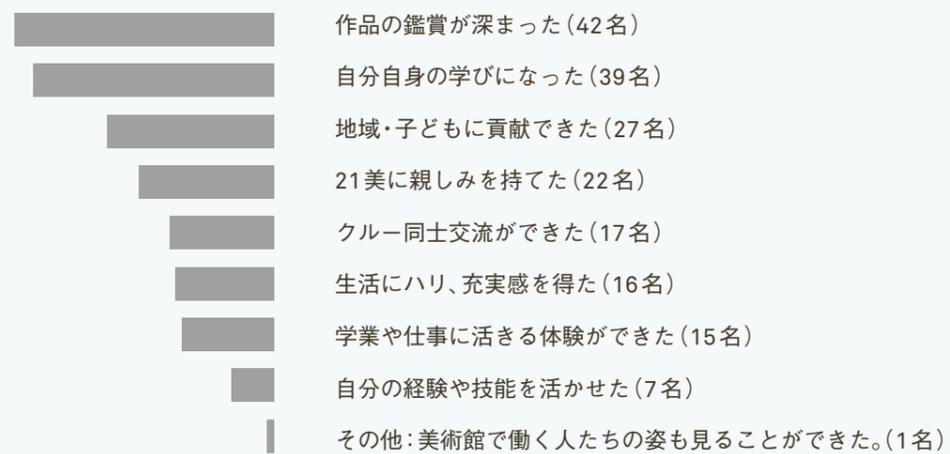


解散式にて

クルーズ・クルー アンケート（47名回答、原文一部掲載）

1) クルーズ・クルーとして活動に参加して

よかったことがあれば教えてください(複数回答可)



2) 今年度のクルーズを経験して、

なにかあなたに変化はありましたか？あれば教えてください

- ・子どもたちと同じ目線に立ってみる。むしろ、教えられることが多いという発見がありました。
- ・幅広い世代の方と関わることで、色んなお話を聞き、自分の価値観が広がりました。
- ・1人で作品を鑑賞するときとは違い、様々な見方を発見したり、思考を深められることがとても豊かな経験だと思いました。自分の思考が多くのかの考えのうち的一部分だと気づいたことで、作品制作や鑑賞においても、もっと視野を広げたいと思うようになりました。
- ・小さな頃美術が好きだった気持ちを今まで忘れていたんだと、思いました。クルーに参加したことでアートに再会できた気持ちでいっぱいです。
- ・通勤時や散歩をしている時など、ふとした発見、気づきの瞬間に出会う機会が増えました。クルーズの期間は、日々のちょっとした楽しみ方やそのことをなぜ楽しんでいる自分があるのかなど気づきが多くなりました。(みる・感じる・考えるが自然にトレーニングされているようです。)

3) 今年度の子どもたちとの活動のなかで行なった工夫や

印象に残ったことがあれば教えてください

- ・なるべく笑顔を絶やさないこと。注意ではなく、1つ1つの声掛けで。なるべく心を大きく開いて。
- ・子どもたちからの言葉ではじめて気づいた、教えてもらったというときに、大人の私(クルー)がその言葉で気づいた、思ったことを伝えるようにすることで、一緒に作品をみて・感じて・考えるに参加することができた。
- ・初めて会う大人にいきなり難しいことを話しかけられても困るだろうと思ったので、なるべく気軽に答えられるように言葉をかけるようにしました。どこから見る？と言ったりして動いてもらおうと、そのあとどうして？ そうだねーと話が盛り上がったような気がします。
- ・挨拶係、案内係、バッグ係とクルーたちに役割を振り分けたことで、どこか「スタッフ任せ」的な気分でいた私たちも目の

- ・今回は様々な影響のため、スタッフもクルーも皆さん新人ということで、クルーズを具体化する段階から関わることで、自分が何をできるか、そしてどのように動いたら子供もお客様にも良いことになるか、考えることができました。
- ・作品鑑賞が、知識とのすり合わせではなく、より経験として、楽しめるようになりました。
- ・今まで関心がなかった様々な物事に興味をもつようになった
- ・コロナで外に出かけることがなくなった時、クルーズクルーが唯一社会とのつながりになった。
- ・解釈が難しいと少し距離を持って観ていた現代アートを、より身近に感じられるようになった。クルーズのある日は、責任感とともに子どもたちとどんな話をしようと思いで生活に張り合いが出るようになった。

- 色を変えた。初めて組んだクルー仲間とコミュニケーションを取り合ったり、挨拶の上手な方の言い方を盗ませてもらったり、逆に「挨拶」をみんなで聞いて共有して補いあったりと・・・切磋琢磨する場が生まれたのはよかった。
- ・会話は、子ども達が関心や感心がある事を知るようにし、そこから入るように進めました。例えば、漢字、大きさ、社会、理科など。
- ・鑑賞を促すために、2周目には作品の素材について聞いてみたり、展示空間そのものについて聞いてみたりしました。
- ・子どもたちが感じていることを素直に言葉に表してもらうように、こちらから問いかける。わからない、という子には目に見える色や形から聞くようにすると、話しやすかった。

子どもたちとの会話から

子どもたちはクルーズ・クルーとの会話を通して、それぞれの想像力を広げていきます。P.14では、「コレクション展 スケールズ」の「鑑賞の時間」に実際に起きた会話の一部を紹介し、また、P.15では、クルーズ・クルーのスタッフがクルーズ・クルー役として子どもたちと接した際の記録から問いかけや返答によって子ども達の会話に変化する例を紹介し、クルー役：高橋洋介(ミュージアム・クルーズ担当スタッフ)

「鑑賞の時間」のある日の風景

展示室6 ス・ドホ《階段》2003



© Do Ho Suh
Courtesy of Do Ho Suh and Lehmann Maupin

クルーズ・クルー(以下、クルー):「みんな、ここにきたのはじめて？」

子どもA・B・C:(以下、A、B、C)「3回目！」

クルー:「3回目！？ じゃあ、3回みて気づいたこと、僕に教えてほしいです。まず、これはなににみえた？」

A・B・C:「階段！」

クルー:「みんなの知ってる階段と似てる？」

A:「非常階段みたいに見える……」

クルー:「どうして非常階段って思った？」

A:「赤いし、消防車みたいな感じ。」

クルー:「非常階段ってことは、急いで降りなきゃって感じもするね。みんなは学校の階段、急いでも、ダダダって走って登ったりする？」

B:「何回もありますよ！ 僕足から落ちたことある！」

クルー:「うわー痛そう〜。じゃあさ、この階段、学校の階段と同じように登ったらどうなりそう？」

C:「布でできとるから、落っこちそう。」

B:「バランスとらないといけないよね。」

クルー:「じゃあ、足を乗せたらグニャッってなる？」

B:「予想ですけど、なる！ それか破ける！」

クルー:「じゃあ、登れない階段ってこと？」

B:「いや、大丈夫です！ こうやって…」

クルー:「なるほど！ 四つん這いになって、よじ登るんだ！ ちょっと人間やめた感じで登ればいいのね笑」

B:「そうそうそう」

クルー:「でもさ、それにしても、必死にもがいて登らないとダメなんだね」

A:「いや、滑り台なんじゃない？ だってここは薄いけど、ここは分厚いですよ〜ね？」

クルー:「確かに、よくみると、足をのせるところは分厚くなってるから、足をのせると実は大丈夫なんじゃないか説？」

A:「うん、あくまで説。」

クルー:「ってことは、学校の階段と同じようにダダダって登るのは……」

C:「登れなそう！」

B:「崩れ落ちそう！」

クルー:「じゃあ、もうひとつ教えて。この階段登れそうな人ってどんな人？」

A・B・C:「動物！」「猿！」「ゴリラ！」「体重がめっちゃ軽い人！」「いや、ゴリラちゃうやろ！」「鳥！」「hamster！」「赤ちゃん！」「猫！」「死んだ人！」

クルー:「え、死んだ人？」

B・C:「いや、かわいそすぎるやろ。」

クルー:「じゃあ、みんなも死んだ後、この階段登れるのかな？」

A:「はい！ 登れます！」

クルー:「死んだ人はこの階段を登ってどこへいくの？」

A・B・C:「天国！！」

クルー:「地獄じゃなくて天国なの？」

B:「だけど、赤いっていうのが、ちょっとだけ……」

C:「やっぱり地獄だ、地獄！」

A:「黄色だったら、天国でしたね」

B:「白でも天国！」

クルー:「赤だったら、なんで地獄なの？」

A・B:「血！」

C:「血の池地獄！」

クルー:「じゃあ、もう一面真っ赤だし、たくさんの人が殺されてる感じ？」

A・B・C:「そうそうそう」

B:「ありえない話だけど、血塗れになってる死体がドスドスドスって登ってる感じ！」

C:「めっちゃ怖い、相当ホラーやん」

クルー:「え、でも、よくみたらさ、コンセントとかついでるけど？」

B:「あ、ほんとだ」

A:「死んだ人がスマホ充電する笑」

一同笑

クルー:「地獄退屈だし、ちょっとYouTubeでもみようかなみたいな。だいぶ余裕あるね笑」

C:「でも、透けとるから、使えん。」

B:「あと高い位置にあるから、ケーブル届かん」

隣で聞いていた別のグループの子「ここは走馬灯をみる場所で、生まれた場所なのかも」

B・C:「走馬灯ってなに？」

クルー:「人は死ぬ瞬間にこれまでの人生を一瞬でみるらしいんだけど」

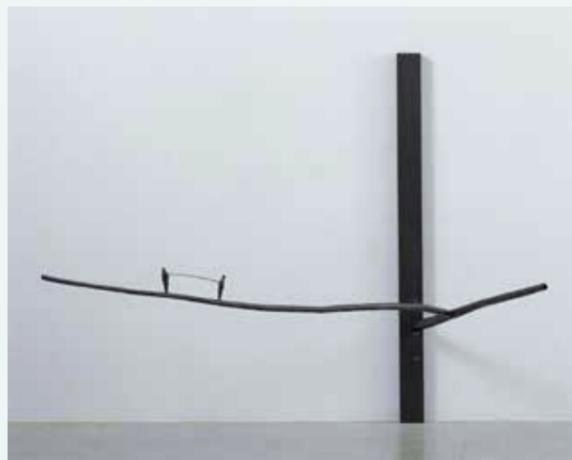
C:「みんなみるの？」

クルー:「死んだことないからわからんけど。で、その走馬灯の風景ってこと？」別のグループの子「そう！」

クルー:「最初、ただの階段にみえたけど、みんなでみたら、生きるとか、死ぬとか考えさせる、意外と深い階段だったね。じゃあ、いまやってみるに今度は自分たちで他の作品みにいってみて」

子どもへの問いかけと返答の事例

展示室1 宮崎豊治《眼下の庭》1993



宮崎豊治《眼下の庭》(部分) 1993 photo: SHIJI TAKU
© MIYAZAKI Toyoharu

クルー:「この人たちは何をしているの？」

パターン1 子ども同士の意見をつなげて、新しい問いを立てる

A:「喧嘩しとる」

B:「どっちも自分。こっちに行きたい自分とあっちに行きたい自分がある」

クルー:「ふたりの意見をあわせるなら、自分の中にいるいろんな自分が喧嘩しているところを表現しているってことかな？」

パターン2 話題を変えた後に、元の話題とつなげる

A:「両方、自分はひとりぼっちだと思っているけど、本当はつながっている」

クルー:「ふたりは友達同士なの？」

A:「ふたりは心が繋がっているから、ほんとの友達。離れ離れになっただけど、真の親友同士！」

クルー:「この心臓に刺さっている線がふたりの絆を表現してるんだ。君は友達思いの優しい人だね。じゃあ、ふたりはどんな場所にたってる？」

A:「壊れた鉄橋に立ってる。」

B:「早く帰りたい人や、きっと」

クルー:「どっちが帰りたい人なの？」

B:「こっちの人。あそこの棒が家」

クルー:「じゃあ、あっちの人は……」

C:「家に帰らずに、天辺にいきたい」

クルー:「ふたりは目指しているところが違ったから、友達だけど、別れてしまったのかな？」

カプーアの部屋



アキカジ《カプーアの部屋》2004
© Aki KAJI

クルー:「みんなはこれ何に見える？」

パターン1 反対の視点をぶつける

A:「穴あいとる」

クルー:「どれくらいの深さの穴に見える？」

B:「深海100m」

クルー:「天井の高さが5mくらいだから、100mっていうとこの20倍だね。ストーーーーーンみたいな穴。入ったらあの世行きだね笑 逆に空いてないって思う人はいる？」

C:「空いてないよ」

クルー:「理由いえる？」

C:「だって、黒すぎるもん」

クルー:「普通だったら、もっと明るくて凹んでる形が見えるはずだもんね。じゃあ、空いてるか空いてないか考えるための新しいヒントが、この部屋のどこかにあるかもしれないから、探してみよっか？」

A:「あ、上に光ある」

B:「上から光が差し込んでるのに、中が見えないから絵だと思う」

クルー:「空いてる派はどう？」

A:「でも、光は上にあって、穴にちゃんと当たってないよ。ちゃんと光が差せば、穴の中に何かみえると思う」

クルー:「本当はあるのに、光が差さないから、見えないんだ。じゃあ、つくった人はなんで光を当てなかったんだと思う？」

A:「本当はあるのに何も見えないってことは……ここが世界の終わりで、人生の全部が終わって、真っ暗になる」

クルー:「世界が終わる瞬間を表現したかったのか。でも、光は上から少しは差してるかもよ？」

A:「黒い中に閉じ込められたけど、光がみえて、脱出できる」

C:「こっから出れたらね」

パターン2 どんな意見も肯定して問いに変える

A:「ブラックホール」

クルー:「ブラックホールってことは入ったらもう出て来れない？」

B:「そうかもね」

A:「光も逃げれん感じ」

クルー:「このブラックホールみたいな穴の中に入ったらどうなりそう？」

B:「別の場所にワープする」

C:「世界が反対になりそう」

クルー:「光も吸い込んでじゃう穴なら、異世界につながってもおかしくないね」

2020年の 「ミュージアム・クルーズ」

2020年は多くの文化施設や学校現場がこれまでの取り組みを見直すことになった。この記録集では「ミュージアム・クルーズ」をどのように実施をしたかを記載したが、その背景やそこから見えた光景を記したい。

森 絵里花(プログラム・コーディネーター／ミュージアム・クルーズ担当)

1. 「ミュージアム・クルーズ」はできるのか？

本事業は毎年年度末の2月から3月にかけて、次年度の美術館の来館予定を各学校と決定している。2020年の来館予定日はコレクション展に合わせ2020年10月から2021年1月と決めたものの、2020年度の「ミュージアム・クルーズ」は実施できるのか、何を变えずに何を变えていくのか、年度の切り替わりの頃から検討を始めた。

先行きがわからないなか、「金沢市内の小学4年生を対象に」「金沢21世紀美術館やコレクション作品に親しむ機会をもつ」を最低限の目標として考えたことを覚えている。「全ての学校か(一部の学校か)」「来館できるか(できないか)」「クルーズ・クルーは参加できるか(不在で行うか)」など、これまでの「ミュージアム・クルーズ」では当たり前として大事にしてきたことが揺らぐ時間があつた。

様々な場合分けをするなかで、「3つの出会い」をなるべく維持して、リスクを抑えてできる方法はないかという方向性が見えてきた。教育委員会や検討会での相談を重ね、子どもたちやクルーが三密を防ぐなどの感染予防策、リスクを分散させたスタッフ体制など今年ならではのやり方に組み替えていった。

それでも本当にミュージアム・クルーズが実施できるのか、全ての学校を迎えられるのか、不安と隣り合わせだった。

2. 変わった「クルーズ・クルー」の形

3つの出会いを変わらずに大切にすなかで、最も変わったのは「クルーズ・クルー」(以下クルー)だ。

これまでは、8人程度の子どもたちのグループに同行して1時間を親密に過ごし、自己紹介の仕方や展示室の回り方、声かけを工夫していた。それが展示室を回遊する3-4人の子どものグループと、短いやりとりのなかで一緒に作品を

見るようになったことはクルーとしての楽しみ方や工夫も大きく変わったはずだ。これまでのように1つの作品をじっくりと掘り下げていくことばかりではなく、子どもが作品をよく見るような短い声かけをしたり、子どもたち同士で見て感じて話せるような問いかけを投げかけたり、と新しいコミュニケーションの様子が見られた。

また、今年は集合場所への移動や手指消毒、子どもへの挨拶などの「3つの役割」をクルーに分担してもらった。子どもを出迎えるところからクルー同士で協力していた。

この変更は、継続して参加しているクルーにとっては大きな衝撃で、「始めは馴染めず、従来のものとは比べて欠点ばかり目立った」といった声も聞かれた。しかし、回を重ねるうちに「自分も柔軟に、変化に対応しなければと思っている」「良さもわかってきた。担当する作品でたくさんの子どもの意見を聞くことも楽しい」と心境が変化したことを打ち明けてくれた人もいた。

様々な変更点はあつたものの、「子どもと一緒に作品を見る人」「子どもの話の聞き手」というクルーの根底にあることは変わっていない。むしろ、子どもが話すことを楽しみにする、子どもと話す合間にもう1度作品と向き合う、というクルーの姿はまさに「子どもとアートに出会う」人であった。

3. 子どもたちを信じる

3-4人を1グループとし、子どもたちが主体的に見て回る形式はある種の挑戦であった。

学校関係者アンケートにも「75分間、すぐに見て回ったと飽きてしまうのではないかと思っていた」という声が寄せられていたが、結果としてそれは杞憂だったことがわかる。子どもたちが伸び伸びと過ごし、自分たちのペースで見て回る姿が見られた。まずは全ての展示室を見る、それからクルーに促され2回目3回目と気になった作品を見ていた。

3-4人を1グループにしたのも、子どもたちの主体性を活

かすのに適切な人数であった。地図を読む、集団で目的地を決めて行動する、時間を守る、などこれまでクルーが補助していたことも子どもたち自身で行っている姿が見られた。また、展示室では時折1人で見たい所を見たり、2対2で分かれて友達同士で話し合いながら見た後でまたグループで集まって移動をする姿が見られた。自分の心の動くままに鑑賞すること、グループでの行動を意識することの行き来があるようだった。

今年の子どもたちへのアンケートによると、美術館に初めて来た子どもが34%、2-3回目が35%、4-5回目が15%、6回目以上が15%である(未記入1%)。過去に来館経験がある子どもも、全員が有料の展覧会ゾーンで作品を見たわけではないだろう。3分の1以上の子どもが美術館という未知なる場所を初めて訪れるその「ドキドキ」感を私たちは大切にしたい。

今年前半のコレクション展のエリアを見て回る45分を「鑑賞の時間」、後半の広場を含む交流ゾーンを見て回る30分を「探検の時間」と呼び分けていたが、子どもたちの姿は活動全体を通して「鑑賞」であり、「探検」であった。大人が思うよりも、子どもたちはずっと自分たちで見て回る力がある。私たちは子どもたちのワクワク感を高めるような事前の準備と、子どもたちの言葉を受け止め、面白い素直な耳と心があれば良いのだと改めて実感した。

4. 学びの場としての美術館の役割

他館のコロナ禍での教育普及プログラムの事例をみると、やり方は様々である。その中でも共通しているのは、「自館が大切にしていることを反映したもの」「自館のこれまで積み上げてきたものの発展形であること」であると感じた。

ミュージアム・クルーズに照らし合わせて考えるならば、「金沢市内の全ての小学校と特別支援学校を対象とし、金沢に生まれ育った子が1度は金沢21世紀美術館に来るとい

環境をつくること」「美術館、現代アート、クルーズ・クルーの3つと出会うこと」を大切にした結果、「子どもたちやクルーズ・クルーがより主体的に美術館で過ごす」可能性が見えた年になった。

美術館ですぐす時間を、それぞれの主体の目線から考えてみる。学校の目線で考えれば「校外学習」「子どもたちがいきいきとする場」。クルーの目線で考えれば「作品を鑑賞する機会」「自分もなにかを学ぶ場所」。

「ミュージアム・クルーズ」という時間がなかったとしても、子どもたちと先生が来館して美術館を舞台に授業を行うこともできるであろうし、大人たちが集まって複数人で作品を鑑賞し学び合うこともできるであろう。むしろ、そのような光景もぜひ生まれてほしい。ただ、私は「市内の小学生たち」と「地域の大人」が出会って、「ともに美術館で影響を受け合う時間」がこの街にあることが何かしらの財産——それは個々人の学びや経験、寛容性、幸福感など——をもたらすのではないかと考えている。

美術館ができることは場の設定でしかなく、作品を見るのは子どもたちや先生、クルーである。今年、再発見した「それぞれの自主性」を次年度以降も磨けるような黒子でいたい。

子どもたちのすべての言葉は、 詩のように佇んでいる

2020年の新型コロナウイルスの感染拡大は、対面コミュニケーションを前提として「出会い」や「人と人の交流」から生まれる学びを大切にしてきた金沢21世紀美術館の「ミュージアム・クルーズ」にいくつかの変革を迫った。その概要については、もうひとりのミュージアム・クルーズ担当である森絵里花の論考に譲るとして、ここでは、2020年度のミュージアム・クルーズで実際に起きた子どもたちの「鑑賞」の質や変化についてクルーズ・クルーの意義とともに考察したい。

高橋洋介(エドゥケーター／ミュージアム・クルーズ担当)

言葉や沈黙の奥に想いを大事にすること

本題に入る前に、「ミュージアム・クルーズ」が目指す学びには、いわゆる学校教育や対話型鑑賞における学習と異なるものが含まれていることについて触れておきたい。

近年、美術館や企業研修などで盛んに行われている対話型鑑賞は、作品の意味や価値に唯一の正解はなく、専門的な知識がなくても他者と対話を通して共同でつくりあげた作品解釈が鑑賞者にとって意味のある知識となり、自発的な学習に寄与する、という立場をとる。ミュージアム・クルーズに参加する小学校が、図工の授業や「学びの場」としての美術館に期待することのひとつにも、学習指導要領における「主体的で協働的な学び」や「言語活動の充実」という点があるという意味では、対話や言語に基づく学習が目指されている。

しかし、小学4年生という大人より語彙の少ない鑑賞者が鑑賞を深める際に、自分の感じたことを言語で十分に表現できるわけではない。子どもがなんらかの理由で沈黙するとき、クルーたちは、無理に対話せず、その子のたたずまいをそのまま肯定する。それは、例えば、子どもが言語化しなかったとしても、言葉にできないが五感で味わっている体験や、その子自身の性格や自由を尊重するということでもある。多様性や個性を受け入れ尊重する学びの場として、非言語コミュニケーションや、非対話的な鑑賞から生まれる学びも、ミュージアム・クルーズは同様に大切にしてきたことをここに強調しておきたい。

鑑賞にともにより添うことの重要性

前節において、対話以外の学びもまたミュージアム・クルーズでは同等の価値があるものとして尊重されていることに触れた。しかし、子どもにとって他者との対話が鑑賞を深めるために重要であることは間違いない。本節以降では、子どもたちの旅

の仲間である「クルーズ・クルー」の意義を今年度の子どもたちの鑑賞の様子やアンケートの傾向に基づき、考察したい。

まず、前述した森の論考においても触れられているが、今年度は、3-4人のグループ制で子どもだけで鑑賞する形へと変化したことによって、大人が同伴したときよりも遥かに早いペースで展覧会を回る子どもの姿が多く見られた。それは、大人のペースから開放されて子ども本来の時間と興味に従って鑑賞できた、という意味では肯定的な変化として評価できるだろう。しかし、多くの子どもたちはまずさっと全体をみて周り、その後、2度、3度全体を見直している。実感に即して言えば、クルーなしでみて回れば、子どもたちはあつという間に「見た」つもりになり、時間を持て余してしまう状況になってしまったことも、今年度の課題としてはっきりと浮かび上がってきたことだった。

美術館において、みんなで鑑賞することの醍醐味

子どもたちのアンケートにおいては「カプーアの部屋」や「タレルの部屋」といった恒久展示作品への言及が例年以上に多く見られた。それらは、作品の中に自分も友達も取り込まれてしまうような種類の作品ばかりであり、画像では体験できないもの、つまり、美術館で実物を見ることの意義を改めて浮き彫りにしたといえる。

一方で、子どもにクルーが付き添っていた昨年度以前であれば、恒久展示作品以外への言及が多く存在したということは、クルー不在の場合、空間全体を作品として体験する作品以外は、子どもたちの鑑賞があまり深まらなかった可能性も示唆している。勿論、別項の「子どもたちとの会話から」に掲載された鑑賞の実例のように、さまざまなクルーが各自の個性に応じて鑑賞の現場で寄り添うことで、子どもたちは、自分たちの言葉によって作品の意味を獲得し、それぞれの見方を深めていく場面が今年度も毎日のように生まれた。時間的・



人数的制約の中で、ひとつのグループだけにじっくり付き添うことはできないが、子どもたちの印象や気持ちや冗談のすべてを前向きに肯定し、全員が話し合えるトピックを提示したり、子ども同士でより話しやすくなるように発言をつないだり、あえて子どもの確信に揺さぶりをかけたりすることで、その場にいるすべての人の言葉や表情を手掛かりに想像力を広げ、あてどなくそれぞれの思考を航行させ、これまで自分だけでは考えたことがない作品の見方や意味をつくりあげていく。それは、他者の存在が鑑賞の深化には不可欠であることをはっきりと示している。

今年度の方法であれば、理論的には、クルーズ・クルーは、美術館に訪れた学校のすべての児童と話すことができるという意味で、これまで以上にひとつの作品を多角的に深めていく機会に恵まれるようになったとも言える。安心・安全な運営のために、クルーはあえて付き添わず鑑賞の視点だけを与えて、子どもたちに他の作品の鑑賞を促すことも大事であることは疑い得ないが、2021年度も試行錯誤しながら、多くのクルーズ・クルーと子どもたちが鑑賞を深める楽しさを幾度も味わうことに期待したい。

芸術を語ることは詩を詠むこと

今年度ミュージアム・クルーズの研修において、講師として招聘した京都芸術大学准教授の伊達隆洋氏は「鑑賞者の言葉は作品にまつわる一片の詩のようなものだ」と言った。それは、矛盾する要素すらひとつの作品の中で共存させてしまう芸術作品を、論理的な言葉で語ることの(不)可能性を端的に教え



てくれる。だからこそ、子どもたちが作品を語る言葉を何万回と聞いてきた身としては、こう言い換えたい。「子どもたちの言葉はどのようなものであれ作品の本質を表現した詩なのだ」。語彙も偏見も少ないからこそ飛躍する子どもたちの言葉は時として大人の言葉以上に作品の核心を捉え、だからこそ私たちはそこから多くを学ぶことができるはずだ。それは、大人になり、さまざまなことを知れば知るほど、作品を純粹に楽しむことができなくなるとか、言語表現が優れているほうがより深く鑑賞できるという意味ではない。むしろ、ミュージアム・クルーズの醍醐味のひとつをこう表現したい。子どもの鑑賞におけるすべての言葉を大人と同じ価値をもつものとして平等に扱うことで、逆に知れば知るほど、当たり前だと思っていたものが崩れ、これまで考えたことがなかった別の世界や自分に出会う可能性が開ける楽しさに出会うことなのだ、と。

展覧会概要

「コレクション展 スケールズ」

会期：2020年10月17日(土) - 2021年5月9日(日)

※前期：10月17日(土) - 2021年1月31日(日)／後期：2021年2月2日(火) - 5月9日(日)

会場：金沢21世紀美術館 展示室1-6、光庭、カプーアの部屋

出品作家

出品作家：

チェン・ウェイ、福本潮子[前期]、イザ・ゲンツケン、アニッシュ・カプーア、ギジェルモ・クイッカ

宮崎豊治、ス・ドホ、フィオナ・タン、田中信行[前期]、ツェ・スーメイ[後期]

ペーター・フィッシュリ、ダヴィッド・ヴァイス、ヴラディミール・ズビニオヴスキー[後期]

金沢21世紀美術館維持会員

SANAA事務所
米沢電気工事株式会社
ナカダ株式会社
金沢市農業協同組合
株式会社福光屋
ヨシダ宣伝株式会社
金沢信用金庫
株式会社総合園芸
西日本電信電話株式会社金沢支店
株式会社ヤギコーポレーション
株式会社北國銀行
一般社団法人金沢建設業協会
ニッコー株式会社
医療法人社団 健真会 耳鼻咽喉科安田医院
株式会社メープルハウス
株式会社マイブックサービス
公益財団法人金沢勤労者福祉サービスセンター
株式会社浦建築研究所
金沢中央農業協同組合
株式会社グランゼーラ
まつだ小児科クリニック
公益財団法人高岡市勤労者福祉サービスセンター
アルスコンサルタンツ株式会社
しま矯正歯科
協同組合金沢問屋センター
一般社団法人MuU
三谷産業株式会社
株式会社エイブルコンピュータ
スーパーファクトリー
株式会社中島商店
株式会社橋本確文堂
ヨシダ印刷株式会社
株式会社北都組
金沢市一般廃棄物事業協同組合
金沢商工会議所

株式会社竹中工務店北陸営業所
一般社団法人石川県鉄工機電協会
大村印刷株式会社
石川県勤労者文化協会
前田印刷株式会社
株式会社うつつのみや
公益社団法人金沢市医師会
連合石川かなざわ地域協議会
株式会社金沢環境サービス公社
医療法人社団竹田内科クリニック
株式会社日本海コンサルタント
株式会社アイ・オー・データ機器
石川県中小企業団体中央会
能登印刷株式会社
株式会社金沢舞台
北陸名鉄開発株式会社
高桑美術印刷株式会社
株式会社浅田屋
北菱電興株式会社
株式会社四緑園
株式会社橋本清文堂
カナカン株式会社
株式会社かゆう堂
株式会社バルデザイングループ
石川県ビルメンテナンス協同組合
横浜エレベータ株式会社
株式会社ほくつう
株式会社グッドフェローズ
日本海警備保障株式会社
株式会社金沢商業活性化センター
株式会社加賀麩不室屋
べにや無何有
日本ケンブリッジフィルター株式会社
日機装株式会社
横河電機株式会社金沢事業所

有限会社芙蓉クリーンサービス
株式会社インプレス美術事業部
株式会社甘納豆かわむら
ArtShop 月映
株式会社アドバンス社
金沢ターミナル開発株式会社
株式会社計画情報研究所
株式会社ビー・エム北陸
一般社団法人石川県繊維協会
株式会社 大和
アムズ株式会社
株式会社 あまつぼ
ヨシダ道路企業株式会社
株式会社金太
イワタニセントラル北陸株式会社
末広フーズ株式会社
北陸スカイテック株式会社
辻商事株式会社
アキュテック株式会社
森平舞台機構株式会社
アズビル株式会社
株式会社五井建築研究所
金沢セメント商事株式会社
ホクモウ株式会社
医療法人社団映寿会
合同会社 館みつ川
株式会社山田写真製版所
株式会社ユニークポジション
株式会社鍛冶商店
株式会社東急ハンズ金沢店
坪田 聡
林檎舎アップルカンパニー
アイバブリッシング株式会社
株式会社ホクスイ
山田知明

(2021年2月現在)



2020年度

金沢市内小学4年生全児童招待プログラム

「ミュージアム・クルーズ」

ー

主催：金沢21世紀美術館 [公益財団法人金沢芸術創造財団]

共催：金沢市教育委員会

助成：金沢ライオンズクラブ

検討委員：加納亜紀、馬場志穂、松本啓孝

(金沢市立小学校教諭、50音順)

ー

金沢21世紀美術館スタッフ：

[ミュージアム・クルーズ担当] 森絵里花、高橋洋介

[展覧会担当] 池田あゆみ、立松由美子

プログラム・アシスタント：飯田崇子、竹村菜穂美、

西田夏希、佐々木修吾

ミュージアム・クルーズガイドブック 2020-2021

MUSEUM CRUISE GUIDE BOOK 2020-2021

ー

編集：森絵里花、高橋洋介

編集補：飯田崇子、竹村菜穂美、西田夏希、佐々木修吾

デザイン：原田祐馬、西野亮介、田中千晶 (UMA/design farm)

ー

発行日：2021年3月31日

発行：金沢21世紀美術館 [公益財団法人金沢芸術創造財団]

〒920-8509 石川県金沢市広坂 1-2-1

禁無断転載

No part of this document may be reproduced in any form or by any means.

©2020 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

All rights reserved.

ISBN 978-4-903205-90-8



金沢 21世紀美術館
21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa